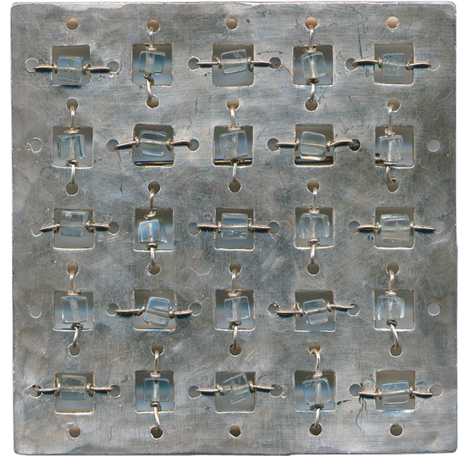


濱口 恵 HAMAGUCHI Kei

1948年 東京生まれ
1973年 東京芸術大学美術学部卒業

1976年 個展：村松画廊 東京
1979年 「山口長男と7人の新人展」 東京
2001年 NHK「男の食彩」向笠コーナーのために作品を毎週製作 *2003年まで
フィラデルフィア美術館アートクラフトショー アメリカ
2003年 現代作家立体小品展「浮気のかたち」東京
個展：「濱口恵 食彩ブローチ」東京
「工芸家が体験した現代アメリカ展」 東京
2007年 現代作家立体小品展「二・五次元孝-絵画孝-」京都,東京

その他、毎年個展・グループ展、多数開催。
<http://ait.shinchaku.com/artist/3.php>



「square」 2007年
5.5×5.5cm
銀、アクアマリン



「Hoshiboshi」 2007年
4×3.5cm
銀、石

「作り手である。」というより
「発見者でありたい。」のかもしれない。
日々発見し、感じたことをどれだけ実現できるか。
それを見たいと思う。

濱口 恵

————— 芸術はイリュージョン —————

30年以上前のこと、シカゴから日本へ帰る私に叔母が小さな石をくれました。メキシコで買ったというそれは、オパールらしい輝きが所々に見られるものの、大きさ3cmほどの茶色い石で、叔母は「驚よ。」といいますが、私にはどうしても太めのウズラにしが見えない、つたない彫刻が施された代物でした。心細く暮らした3年間をやさしく支えてくれた叔母からのプレゼントということだけの意味しかないその石は、筆筒の中で静かに時を過ごしていました。その間に、私は濱口恵という金属の作家と出会い、作品を通してこの作家の感じ方、考え方を垣間見、その面白さを楽しみ、「ふわふわ」と漂っているような「自由な精神」に共感し、作品も、作家も大好きになっていました。ある日、私は濱口さんにこの石を渡しました。「ぜんぜん好きになれないけれども、せっかくだいだいたのに仕舞いばなしで申し訳なくて、。何とかなるかしら？」と。濱口さんはその石を掌に乗せて眺めながら「大丈夫、大丈夫、。うん。大丈夫。いいわよこれ。」と言って、私にとって魅力的でなかった石を、「いつも身近に置いておきたい」と思う小品に作り上げてくれました。そしてそれにピンをつけて服にも付けられるようにしてくれたのです。私の襟についていたブローチを見てフィラデルフィア美術館のフィッシャー博士は「濱口さんがブランクーチを好きなのが感じられる。」と教えてくれました。

濱口さんはよく「芸術はイリュージョンだと思ふのよね。ただの布と油絵具が、すごく価値のあるものになってしまうでしょ？」と言います。なんだかそういうとペテンのようですが、あの石が私の大のお気に入りに変身したことを思うと不思議です。私だけがその幻影を見ているのであって、他の人が見たらやはり何の面白味もない、ただの石ころなのでしょうか。ただの石と銀が、作家の手を通ることでその精神を引継いで姿を変えます。その精神をどれだけの人に感じさせられるか、どれだけ多くの人にイリュージョンを見させられるか、それが作家の実力なのかもしれません。

上林 喜美子 (有限会社 磯谷商店)

NPO法人 アート・インタラクティブ東京

〒105-0003 東京都港区西新橋1-4-12 長尾ビル7F

Tel:Fax 03-3593-7274

email: info@artinteractivetokyo.com

<http://www.artinteractivetokyo.com>

「会員の眼」と名づけられた企画は、AIT会員が企画・主催する展覧会です。AIT自身が企画・主催する「連続作家紹介」とは異なり、作品を展示する作家の年齢などは問いません。AIT会員がぜひ世に出たいと望む美術作家の展覧会です。詳しくはAITのホームページをご覧ください。

NPO法人(特定非営利活動法人)「アート・インタラクティブ東京」は、現代の美術状況に関する多くの情報を、美術コレクターに公開することを目的としています。実際に美術作品を購入し愛好する人たちが、より広範な情報のなかから、個人の好みや考えにもとづいて美術作品を選べるようになることを支援し、そのことによって、日本美術が愛好者自身の「眼」によって発展するようになることを目指します。



地下鉄●銀座線虎ノ門下車3分(出口9) ●千代田線霞ヶ関下車3分(出口C3,C4) ●都営三田線内幸町下車2分(出口A4)
●JR新橋下車3分(日比谷口)